OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	Interface humanities 03
Author(s)	
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12940
rights	(c) 大阪大学21世紀COEプログラム インターフェイスの人文学 / Interface Humanities
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

性別という役割

荻野 美穂

ヒトの場合、「女」あるいは「男」であるというのは単なる生物学的自然でもなければ、自動的に「なる」ものでもない。私たちは生まれ落ちたとたん、それとは知らぬ間に、性器の外見を手がかりに「男」と「女」のカテゴリーに振り分けられた後、それぞれの社会の性別文化に応じた名前や服装、しつけや教育を与えられ、何が女として、あるいは男としてふさわしいか、ふさわしくないかを学習しながら成長していく。多くの社会で性別は、その社会の構成員を分割する最も基本的な差異として位置づけられているだけでなく、二つの性はことさらに対照化され、非常に異なったものとして構築される傾向が強い。

このような文化的・社会的制度として設定された二元的性差を指して「ジェンダー」と呼ぶ。ジェンダーは、生物学的・解剖学的性差とされる「セックス」と対比して説明されることが多いが、じつはこの二つの境界はそれほどはっきりしているわけではない。たとえば、最近では「男脳・女脳」のように脳の解剖学的構造自体に性差があるとする研究が関心を呼んでいるが、人間の脳は生まれたときには未完成の状態で、その後のさまざまな身体的・認識的経験を通じた学習によって構造やプログラミングが形作られていくといわれる。したがってジェンダーにより遭遇する経験の内容や種類に大きな差がある環境では、脳のマテリアルな構造や働きにも性別というファクターが組みこまれつつ発達していくことになる。すなわちセックスの領域の成立にはすでにジェンダーが関与しているのである。

つまり私たちは、不動のメスまたはオスの体の上に文化としての性別を気分によって着脱可能な衣装のようにまとうのではなく、肉体それ自体の中に社会的性別を深く刻印し、日々それを更新したり微調整しながら「女」あるいは「男」という役割を演じ続けているといえる。たとえフェミニズムや男性学の言説を通じてジェンダーは人為的、文化的に作られたものにすぎないと学んだとしても、多くの人がそれまでの男、あるいは女としてのハビトゥスを修正するのに困難を覚えるのは、このように性別文化が身体化されることによって自然化され、最も効果的な内側からの社会的コントロールの装置として機能しているためなのである。

それでは「男」あるいは「女」という自分に振り当てられた役割が気に入らなかった場合、そこから降りることはできるのだろうか。マッチョなナナハン・ライダーだった蔦森樹は、ある日突然、「男という存在に対する全拒否」の衝動から、優美な「女性」の姿へ、さらには「男でもなく女でもない」存在へと、ジェンダーをトランスする旅に出た。その過程で自分に起きた変化をつづった本は、「男」と「女」が、服装や立居ふるまいにはじまり、生き方や人への接し方、仕事、性行為のしかたに至るまで、どれほどすみずみまで強固に性別カテゴリーによる異文化の壁に隔てられている

かを、克明に描き出している。

とはいえ蔦森は「女」にトランスするために永久脱毛はおこなったが、ホルモン投与や性転換手術による性器の外見レベルでの身体改造はおこなわなかった。というのも彼／女の場合、性器からは、その人間が「男」と「女」のどちらに属すかを決定する最終的根拠としての意味づけがどんどん希薄化されていったからである。蔦森による「体を張った」役割攪乱の試みには、通常ジェンダーの「原因」と考えられている二元的なセックスと異性愛的セクシュアリティとは、じつはジェンダーという文化装置が遡及的に作り出した「結果」、あるいは偽りの起源に他ならないのだという、ジュディス・バトラーの主張を彷彿とさせるものがある。

一方、性別役割転換に関しては、「性同一性障害」と呼ばれる人々の性転換（性別適合）手術も近年注目を集めている。これは自分の性アイデンティティと身体的性別との不一致に苦しむ人が、性器外科手術を中心とした身体改造をおこなうことで「心の性」の方に「体の性」を合わせようとするもので、日本でもこの種の医療が正当な治療として認められるようになった結果、ながらく当事者たちの悲願であった、手術後に戸籍上の性別変更を認める法律も昨年成立した。健康保険証からパスポートまで、日常生活の中で何事につけても書類上の性別記載がつきまとう社会で、「性同一性障害」の人々がこれまでどれほど不自由や苦痛を経験してきたかを考えれば、このこと自体はとりあえず前進と評価できるだろう。

だが、これを強固な性別二元制としてのジェンダーがゆらぎはじめたしるしと解釈することには、慎重でなければならない。性転換手術の前提にあるのは、あくまでも性器の存在こそが「男」あるいは「女」であることの根拠と考え、医療の力によってこの「正しい身体」を回復させようとする発想である。また性転換を望む人は、手術前にも後にも、服装やふるまいにおいてステレオタイプな「女らしさ」や「男らしさ」を忠実に演じることで、社会的な性別規範に順応しようとする傾向が強い。つまりそこでは「性別の変換」という一見破天荒な現象が起きているようでいて、性の二元制そのものは解体されることなく反復され堅持されているという点では、むしろ保守的とすらいうるのである。授業での学生の反応を見ていると、性の二元制を混乱に陥れるような同性愛やトランスジェンダーの話よりも、性同一性障害の人々の話に共感する割合が高いように思えるのも、そこにはある種の既視感、安心感が見出せるからなのかもしれない。

荻野美穂（おぎの・みほ）
一九四五年生まれ。奈良女子大学大学院博士課程中退。人文科学博士。奈良女子大学、京都文教大学を経て、現在大阪大学大学院文学研究科助教授。著書に『生殖の政治学』（山川出版社）、『中絶論争とアメリカ社会』（岩波書店）、『ジェンダー化される身体』（勁草書房）など

ドラマとしての能における「役割」 ―「地謡」についての誤解をめぐって―

天野 文雄

旧臘初旬、東京世田谷の成城大学において日本演劇学会の秋の研究集会が「比較演劇の新視点」というテーマで二日にわたって催されたが、二日目の午後には、「徹底討論」と銘打たれた四時間ちかくにおよぶ「能・浄瑠璃・歌舞伎のドラマ」と題するシンポジウムがあった。筆者はそのシンポジウムに能からのパネリストとして、浄瑠璃の内山美樹子氏（早稲田大学）、歌舞伎の近藤瑞男氏（共立女子大学）のお二人とともに参加した。司会はイプセン研究や比較演劇研究で知られる毛利三彌氏だったが、このシンポジウムは上演という要素を討論の対象からはずして、焦点をドラマ（戯曲）という一点に絞ったことが成功して、日本の伝統演劇の本質の解明という点で、まことに意義あるものになったのではないかと思う。

そのシンポジウムにおける筆者の報告と発言は、いま振り返ってみると、結局、能の詞章の半分ちかくを占める地謡の機能ということにかかわっていたように思う。それは換言すれば、能の地謡部分の詞章を作者の意見あるいは感想とみる長きにわたる誤解にたいする異議であり、その誤解から導かれた、能を特殊な演劇とみる見方―あるいは能は演劇にあらずとする見方―にたいする批判であり、さらにいえばドラマ（戯曲）としての能の「役割」ということでもあった、と思う。

現在の能の地謡と呼ばれる部分は、客席から見て舞台右側に突き出た地謡座に座った八人の地謡役の役者だけが謡い、シテやワキは地謡役が謡う詞章はまったく謡わない形になっているから、その部分を小説の「地の文」のような、第三人称的な文章と理解してきたのは、一面ではムリもないことではあった。そうした理解は、おそくとも明治期には生まれていたようで、たとえば坪内逍遥は、「地謡」を「地の文即ち著作者自身の観察、詠嘆、批評」「地即局外者の言ふべき筈のこと」などと理解していたし（「文致及び脚色上より観たる謡曲文」『能楽』明治三十九年一月）、野上豊一郎も、その著『能 研究と発見』（昭和五年、岩波書店）の巻頭に収められた「能の主役一人主義」において、「能の合唱歌は抒情詩成分もないではないけれども、多くの場合それは叙事詩として取り扱はるべき性質のもの」としている（ここにいう「抒情詩」は純粋なセリフのことで、「叙事詩」はセリフとはみなせない第三人称的な文章を意味している）。

また、現代においても、たとえば木下順二氏に、能役者を他の演劇の役者と比較してのつぎのような発言がある。

> 演劇の俳優は常に自分の扮した役の人物である。自分が扮した人物だけで彼はあるわけで、その人物としての考えや環境などをせりふとして語るだけである。それに対し能役者は、時に自分の扮した役の人物であるが、その次の瞬間にはその自分を他者として見る、他人として見るという面を持つ。その自分を他者として見る何者かであり得るということ、そこが演劇の俳優との大きな違いだと思います。つまり、能役者は、時に役としてのせりふを語る人であるけれども、次の瞬間には自分のことを語る語り手であったり、自分を支配する運命であったり、自

分を包む自然そのものであったり、そのときそのときに見事に変身しながらしかもそのいずれにも没入して自己を見失うことがない。（「現代演劇と能―創作者の立場から」）

これは昭和五十四年に法政大学能楽研究所が催した国際シンポジウム「世界の中の能」における講演の記録であるが、それと明言されてはいないが、能役者を「自分を他者として見る」としているのは、まず確実に地謡を第三人称的な文章と理解した結果と思う。これは具体的には《忠度》などを念頭においての発言かと思われるが―現在の《忠度》はシテが忠度の立場になったり、忠度を討った岡部六弥太の立場になったりするように誤解されている―、現代日本を代表する劇作家である木下順二氏も、能の地謡を第三人称的な文章と考えていたのである。ということは、現代では、ほとんどの人がそう理解しているということであろう。

しかし、じつは地謡部分のほとんどはシテかワキのセリフであり（シテの場合が圧倒的に多い）、第三人称的な客観描写的な文章は一曲の終曲部などにごく一部分あるだけなのである。そのことをみごとに解明したのが昭和六十年に発表された表章氏の「能の同（音）と地（謡）」（『国語と国文学』同年四月号）であったのだが、それは一般の能楽愛好者にはほとんど知られていない。つまり、ドラマ（戯曲）としての能の「役割」は、多くの人が漠然とイメージしているように、「自在」でも「曖昧」でも「交換可能」でもないのであって、その点では他の演劇ととくに変わることはない、ということである。

冒頭にふれた日本演劇学会のシンポジウムでは、筆者はもっぱらそのようなことを主張したのだが、しかしその一方、討論の過程で、「ああしばしとてひきとむる」（《望月》）のように、能には地謡以外のところで、登場人物が自身の行動を自分で説明するようなセリフが少なくないことに参加者の関心が向けられ―このような現象はこれまでは能の「語り物」的な性格に由来するものと考えられていた―、終了まぎわになって、そのような例は西洋の古い演劇にもあるという興味深い発言があった。こうして、「徹底討論」はまさに「比較演劇の新視点」にふさわしい内容になったのだが、その結果、筆者はあらためて登場人物が自分の行動を自分で説明する現象が気になりはじめ、ドラマ（戯曲）としての能の「役割」について、またあらたな課題を背負うことになってしまったのである。

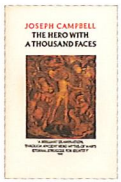
〈望月〉（近江守山の宿での仇討の能）

天野文雄（あまの・ふみお）
一九四六年、東京生まれ。一九八〇年、国学院大学大学院文学研究科修了。上田女子短期大学助教授を経て、一九八七年、大阪大学文学部助教授（芸能史・演劇学講座）に着任。現在、大阪大学大学院文学研究科教授（芸術学講座）。文学博士。専門は能楽史。著書に、岩波講座『能・狂言Ⅰ（能楽の歴史）』（一九八七年、表章氏との共著）、『翁猿楽研究』（一九九五年、和泉書院。同書により第一八回観世寿夫記念法政大学能楽賞受賞）、『能に憑かれた権力者―秀吉能楽愛好記―』（一九九七年、講談社選書メチエ）、『現代能楽講義―能と狂言の魅力と歴史についての十講―』（二〇〇四年、大阪大学出版会）がある。

参考

『ヴァーチャル日本語　役割語の謎』
金水敏
岩波書店　2003

◉〈博士語〉〈お嬢様ことば〉など、ステレオタイプな日本語の話体の原理と起源を、マンガや小説、映画等の例を使って解き明かす。

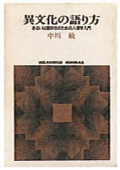


The Hero with a Thousand Faces
Joseph Campbell
FONTANA PRESS 1993（1949）

◉世界の神話・伝説・昔話に共通する物語の基本構造を「ヒーローの旅」ととらえ、ヒーローに関わる登場人物たちの様々な役割 (archetype) を解き明かした。

『ステレオタイプの社会心理学』
上瀬由美子
サイエンス社　2002

◉「ステレオタイプ」の形成と超克の原理について、社会心理学の立場から平易に解説した本。

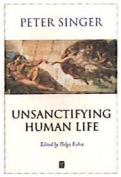


『異文化の語り方あるいは猫好きのための人類学入門』
中川敏
世界思想社　1992

◉人類学のもつ二面性、そのうちの理論に焦点をあてた猫（理論）好きのための人類学入門書。分析哲学的な人類学の紹介。

『交換の民族誌あるいは犬好きのための人類学入門』
中川敏
世界思想社　1992

◉人類学のもつ二面性、そのうちの事実に焦点をあてた犬（事実）好きのための人類学入門書。エンデの民族誌を使った人類学の紹介。



Unsanctifying Human Life
Peter Singer / Edited by Helga Luhse
BLACKWELL PUBLISHERS 2002

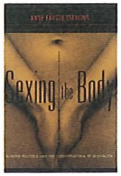
◉人間という生物を特別視しない立場からパーソン論に新しい角度を持ち込んだ。

「役割」を読み解くための12冊

ブックガイド

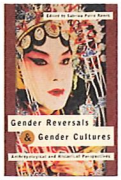
『オトメの祈り―近代女性イメージの誕生』
川村邦光
紀伊国屋書店　1993

◉全国の女学生が女学生ことばで雑誌の投稿欄に繰り広げた「想像の共同体」に迫った本。



Sexing the Body
Anne Fausto-Sterling
BASIC BOOKS 2000

◉科学の言説が連続的で境界のあいまいな身体から、どのようにして二元的な性別を発見し確立していくかを、ユーモアをまじえて描き出す。



Gender Reversals & Gender Cultures
Edited by Sabrina Petra Ramet
ROUTLEDGE 1996

◉ジェンダーが時代と文化に応じてどのように多様な様態をとりうるかを、具体例を通して示している。

『ジェンダー・トラブル』
ジュディス・バトラー／Judith Butler　竹村和子（訳）
青土社　1999

◉「ジェンダーがセックスを捏造した」という挑戦的テーゼによって、大きな衝撃を与えた本。

『男でもなく女でもなく』
葛森樹
勁草書房　1993

◉著者は、日本におけるカムアウトしたトランスジェンダーのパイオニアともいうべき存在である。

『能の多人数合唱』
藤田隆則
ひつじ書房　2000

◉世阿弥の時代から現代にまでいたる能の合唱部である「地謡」の形態と機能の変遷を多くの資料を用いてあとづけた書。著者は大阪大学大学院文学研究科修了で音楽学が専門。

ih.Topics

「インターフェイスの人文学」のさまざまな活動情報を紹介します。

Event Data

「インターフェイスの人文学」イベント紹介（2002 ～ 2003）

「インターフェイスの人文学」では採択以来今日まで、多くのイベント（シンポジウム、講演会、ワークショップ、セミナー等）を主催・共催してきました。その中から代表的なものをリストアップします。各イベントの詳細ならびにその他のイベントについては、ホームページ（http://www.let.osaka-u.ac.jp/coe/）をご参照ください。

岐路に立つ人文学

日英の第一線の歴史学者が一堂に会した学術会議
2003 年 9 月 9 日～ 9 月 13 日
第四回日英歴史家会議　The Fourth Anglo-Japanese Conference of Historians 2003
State and Empire in British History
於　京都市国際交流会館

ジャーナリスト、学習塾講師、元判事らを招いて実践した「インターフェイス」における対話の試み。2002・2003 年度報告書『岐路に立つ人文科学』第 2 部に報告あり
2003 年 9 月 22 日～ 9 月 23 日
ワークショップ「現場という領域、情報という領域」
於　千里阪急ホテル

シルクロードと世界史

最先端の研究成果を高校教員と共有する試み。本誌 30、31 頁参照
2003 年 8 月 5 日～ 8 月 7 日
全国高等学校世界史教員研修会
於　大阪大学付属図書館内　図書館ホール

トランスナショナリティ研究

質の高いセミナーを着実に継続中
2002 年 12 月 20 日～ 2004 年 2 月 20 日
トランスナショナリティ研究セミナー　第 1 回～第 23 回
於　人間科学研究科・ユメンヌホール

連続セミナーの蓄積に基づくシンポジウム
2003 年 11 月 29 日～ 11 月 30 日
シンポジウム「トランスナショナリティ研究の地平」
於　人間科学研究科・ユメンヌホール

イメージとしての（日本）

「日本文学の魅力」「翻訳の可能性」のテーマのもと、各国留学生、国内外研究者が日本文学と翻訳について縦横に語り合う。報告書 DVD に収録
2003 年 3 月 16 日
「日本文学国際研究会」基調報告とシンポジウム
於　グランキューブ

源氏物語・最新の英訳本を刊行
R. タイラー氏ほかを迎え、源氏物語のグローバルなパワーを検証する
2003 年 12 月 6 日
日本文学国際研究集会
「海外における源氏物語の世界　翻訳と研究」
於　大阪大学コンベンションセンター

言語の接触と混交

ブラジルにおける日本語の実態を把握する
2003 年 3 月 11 日
国際研究会「越境する日本語―ブラジル日系社会の言語をめぐって」
於　文学部中庭会議室

言語・文化の接触面における対立・軋轢と共生をめぐる国際シンポジウム
2003 年 11 月 25 日
「言語の接触と混交：多言語・多文化社会としての日本の現状と課題」
於　言語文化研究科・大会議室

映像人文学

東アジアとトルコの文字に焦点を当てたフォーラム
2003 年 3 月 8 日～ 3 月 9 日
第 3 回国際デザイン史フォーラム「画像と文字」
於　大阪市立住まい情報センター・3F・ホール（8 日）／大阪歴史博物館・3F・講堂（9 日）

ウィーン、ブダペスト、プラハをテーマとした連続講演会
2003 年 5 月 28 日～ 5 月 30 日
平成 15 年度 懐徳堂春季講座　第 105 回
「中欧三都市物語―都市の景観と文化―」
於　大阪府立文化情報センターさいかくホール

ベトナムを会場とした、日越の音楽、映像、美術をめぐる交流
2003 年 8 月 31 日～ 9 月 1 日
国際フォーラム「映像の力―日越両国文化の比較と交流のために」
於　越日人材協力センター（ハノイ貿易大学構内）多目的ホール

近代日本人はヨーロッパをどのように見ていたか
2003 年 11 月 5 日～ 11 月 7 日
平成 15 年度 懐徳堂春季講座　第 106 回
「欧羅巴―近代日本からの眼差し―」
於　大阪府立文化情報センターさいかくホール

文化と建築をテーマとしたシンポジウム
2003 年 12 月 2 日～ 12 月 3 日
「映像人文学」メディア・デザイン・インターカルチャー論パリ・シンポジウム
"Environmental Interface between Alphabetic and Non-alphabetic Cultures"
「アルファベット文化圏と非アルファベット文化圏の建築環境インターフェイス」
於　パリ・ラ・ヴィレット建築大学

臨床と対話

臨床コミュニケーションのモデル開発と実践をめぐる提言
2003 年 2 月 23 日
「第 1 回対話シンポジウム―対話を促進する方策と、場の構築のための連携―」
於　大阪大学豊中キャンパス・共通教育本館（イ号館イ講堂）

Research activities 2002*2003
「インターフェイスの人文学」2002・2003年度報告書のご紹介

本プログラムの中間報告として、全8巻の報告書が2003年12月～2004年1月に刊行されました。全巻のリストと目次をご紹介します。閲覧、残部、発送先等については、「インターフェイスの人文学」事務局までお問い合わせください。ホームページによる内容の公開も計画中です。

1 岐路に立つ人文科学

007 《インターフェイスの人文学》というプロジェクト　鷲田清一

015 第1部　変容する人文学の課題
016 越境する歴史学—interface 人文学として　川北稔
045 Zwischen Weltoffenheit und Ethnozentrismus — Rolle des Kulturkonservativismus im Umgang mit der Vergangenheit in Japan　Kenichi Mishima
063 日本における技術者倫理教育の射程—技術者と組織の関係を中心に—　浅野敬一
078 トランスナショナルな市民的不服従　時安邦治

095 第2部　ワークショップ「現場という領域、情報という領域」
096 趣旨説明
101 プログラム
102 提起1「現場という領域、あるいは表現者の立場が問われるとき」
121 提起2「情報という領域」
137 提起3「文化の創造と文化研究—研究と実践の間」
149 提起4「歴史学・歴史教育・歴史認識」
159 提起5「法というアリーナ」

171 第3部　国際フォーラム「映像の力—日越両国文化の比較と交流のために」
172 国際フォーラム「映像の力—日越両国文化の比較と交流のために」　桃木至朗・山口修
191 ベトナム語要旨
199 英語要旨

2 トランスナショナリティ研究

007 はじめに　小泉潤二・栗本英世

019 第1部　研究領域の脱構築と創造
020 グローバリゼーション・スタディーズの課題　伊豫谷登士翁
031 もう一つの在日—米軍基地の人類学的研究をめぐって　田中雅一
042 日本研究と日本人の自我の人類学—日米の対話　エイミー・ボロヴォイ
057 クバーナは解放されたか
—革命キューバのジェンダー／人類学研究に関する一考察　田沼幸子

071 第2部　基礎概念の再検討—人種、エスニック集団、エスニシティ
072 今ふたたび、人種とは何か—現代の人種主義を見つめるために　竹沢泰子
084 論争を越えて—エスニシティ研究の経験論的再考　デレジェ・フェイサ

107 第3部　移動、アイデンティティ、トランスナショナリティ
108 同姓団体による文化復興運動—タイ華人社会の事例から
トランスナショナリティを考える　吉原和男
123 越境する華人たちを見つめる目　陳天璽
137 トランスナショナル・コミュニティにおけるエスニシティの形成
—二つのナショナル・イデオロギーと移民のストラテジー　齋藤千恵
168 マレーシア・ペナンの宗教組織と華文教育に関する人類学的研究の課題と展望　黄蘊
183 蜜柑のシニフィエ—北済州における開発の記憶と在日同胞の存在についての試論　太田心平
196 移民コミュニティにおける宗教実践上の差異と調整
—台湾ムスリム社会における泰緬ムスリム／外省人ムスリム間の差異を事例として　木村自

209 第4部　地域からの視点とトランスナショナリティ研究
210 東南アジア島嶼部のフロンティア空間
—ボルネオ島西部インドネシア／マレーシア国境地帯からの視点　石川登
222 海域アジア史構築の可能性—わたしの地域研究方法　赤嶺淳
235 東インドネシア、クバンにおけるくず屋の生活の実践　森田良成
249 あとがき　小泉潤二
251 執筆者紹介

3 シルクロードと世界史

021 はじめに　森安孝夫

023 「コレージュ＝ド＝フランス講演録　ウイグル＝マニ教史特別講義」　森安孝夫
Four Lectures at the Collège de France in May 2003.
History of Manichaeism among the Uighurs from the 8th to the 11th Centuries in Central Asia.　Takao MORIYASU
024 Ⅰ. Introduction à l'histoire des Ouïghours et leur relations avec le Manichéisme et le Bouddhisme.
039 第一回　世界史の中におけるウイグル史とマニ教＝仏教二重窟 (和文)
049 Ⅱ. Manichaeism under the East Uighur Khanate with Special References to the Fragment Mainz 345 and the Kara-Balgasun Inscription.
063 Ⅲ. The Flourishing of Manichaeism under the West Uighur Kingdom. New Edition of the Uighur Charter on the Administration of the Manichaean Monastery in Qočo.
084 Ⅳ. The Decline of Manichaeism and the Rise of Buddhism among the Uighurs with a Discussion on the Origin of Uighur Buddhism.
113 「トニュクク碑文研究史概論」　鈴木宏節
131 「曹氏帰義軍時代の外交関係文書」　赤木崇敏
159 「敦煌判憑文書考序論」　坂尻彰宏
197 「西夏法典貿易関連条文訳註」　佐藤貴保
257 「全国高等学校世界史教員研修会」　森安孝夫／山内晋次

4 イメージとしての〈日本〉

007 はじめに　伊井春樹
009 21世紀COE「インターフェイスの人文学」日本文学国際研究集会
「日本文学の魅力／翻訳の可能性」概要報告

013 シンポジウム　日本文学の魅力—留学生にとっての日本文学研究
014 パネラー・司会紹介
015 シンポジウム　日本文学の魅力—留学生にとっての日本文学研究—　海野圭介
019 古典文学が今日持つ意味　タケシ・ワタナベ
023 台湾における日本文学研究の現状について　廖秀娟
029 タイにおける日本文学—その海路—　マッタナー・チャトゥラセンパイロート
033 古典文学と翻訳　テレサ・マルティネス・フェルナンデス
038 カジュアル・ソーセージ、コーンぬき　ジャック・ストーンマン
043 柳宗悦の朝鮮芸術論—韓国人による評価の概観—　金容菊

049 シンポジウム　日本文学　翻訳の可能性
050 パネラー・司会紹介
051 シンポジウム　日本文学　翻訳の可能性　伊井春樹
053 翻訳の危機　翻訳の価値　エドワード・ケイメンズ
058 The Dangers of Translation and the Value of Translation　Edward Kamens
065 和歌の現代語訳と翻訳—伊勢物語を中心に—　ジョシュア・モストウ
074 Modern Renditions and Translation of Japanese Classical Poetry, With Special Reference to *Tales of Ise*　Joshua Scotto Mostow
082 与謝野晶子の『新訳源氏物語』—その誤訳の意義を中心に—　ゲイ・ローリー
090 誠実さ、それとも正確さ？　遠藤周作文学を訳してみて　マーク・ウイリアムズ
101 Fidelity, or Accuracy? On Translating Endō's Literature　Mark Williams
115 補足・質疑・応答

134 日本古典文学翻訳データベース
Alphabetical list of translations of classical Japanese works up to 1600
マイケル・ワトソン　緑川真知子

5 言語の接触と混交

007 まえがき 真田信治

009 第1部 ブラジル日系社会と日本語
010 はじめに 記録・保存事業について 山東功
014 第1章
ブラジル日系社会と日本—研究調査概要とその背景—
016 ブラジル日系社会の成立—日本移民小史— 森幸一
020 アリアンサ移住地・スザノ入植地について 浅野卓夫
023 ブラジル多言語環境における日系社会の言語 Elza Taeko Doi
027 研究調査結果概略 ブラジル日系社会調査班
032 第2章
移民社会と言語接触—言語生活調査について—
034 日系社会調査と言語生活 森幸一
052 言語生活調査概要 エレン・ナカミズ 浅野卓夫
060 第3章
談話資料から見えてくるもの—移民社会と日本語の変容—
062 談話収録調査について 李吉鎔 レオナルド・メロ
067 談話収録調査概要 中東靖恵
078 第4章
移民社会の言語問題—日系社会における日本語と日本語教育—
080 ブラジルの日本語教育 佐々木倫子
088 ブラジル日系人の「日本語」を巡る状況と言説—1908年から1941年まで— 森幸一
105 おわりに 工藤真由美

107 第2部 日系ブラジル人をとりまく日本社会 —通時的、共時的次元から—
109 はじめに 津田葵
110 第1章
ブラジル移民への栞(しおり) —横浜・神戸・船上の移民教育— 横田睦子
124 第2章
日系ブラジル人のコミュニケーション：広島県東部地域の事例研究
125 まえがき 津田葵
126 カトリック教会における外国籍信徒との共生への歩み
広島教区における日系ブラジル人を中心に— 津田葵
140 日系ブラジル人の家庭をとりまく現状—ことばの問題を中心に— 高阪香津美
150 日系ブラジル人の子どもたちと日本の学校社会 前村奈央佳
160 日系ブラジル人をとりまく地域社会における現状と課題 新庄あいみ
169 職場における共生に向けて
—日本人と日系ブラジル人従業員の意識調査から— 服部圭子
180 第3章
地域社会及びNGO／NPOの取り組み
181 まえがき 山下仁
182 地方自治体の取り組み：滋賀県内の市町村を例に リリアン・テルミ・ハタノ
187 共生に向けた地域の日本語教室の役割と課題 森本郁代
195 ホスト住民の多文化共生に関わる意識
—大阪府民に対するアンケート調査より— 松尾慎
203 日系ブラジル人をめぐる国会での答弁 山下仁

6 映像人文学

009 まえがき 山口修

011 第1部 国際フォーラム「映像の力—日越両国文化の比較と交流のために」(抄録)
014 映像人文学の提唱 山口修
021 ベトナム音楽データバンク ダン・ホアイン・ロアン
026 ラウンドテーブル報告とビデオ上映—越日音楽の過去・現在・未来— 山口修
028 インターフェイス的学問としての民族音楽学 徳丸吉彦
031 ニャーニャックと雅楽—共通の関心事— トー・ゴク・タイン
032 ベトナム民族学博物館における視聴覚資料の役割 グエン・ヴァン・フイ
038 美術史研究における画像データ援用の試み 肥塚隆
044 文化交流の足跡を示す美術作品への日越共同研究をめざして 藤岡穣

051 第2部 画像と文字
052 「画像と文字」—ハングル・デザイン史研究の現在— 藤田治彦
062 ハングルの創製原理とその運用方法の変遷 ホン・ウンピョ
096 ハングル・デザインと「オウリム」 アン・サンスー
134 ハングル活字の「コル」(かたち)の過去、現在、未来 ハン・ジェジュン
170 ゴン・ピョンウの3ボル式タイプライタ
—ハングル・デザイン史上の位置—(要旨) リュウ・ヒュンギュク

175 第3部 映像人文学の展開のために
176 映像におさまらなかった音の行方—表演芸術の映像記録化についてのメモ— 今田健太郎
180 RVMVにおける権利問題 篠田暁子
184 ヨーゼフ・ラスカ《父の愛》
—20世紀初頭におけるバレエ・パントマイム芸術の再構築に向けて—
1 音楽から映像知へ—ラスカ《父の愛》のバレエ・パントマイム上演に向けて— 根岸一美
2 オーケストラ上演までの道のり 岡村睦
3 オーケストラ演奏用楽譜の作成について 福本康之
4 オーケストラ譜浄書作業に関する報告 竹下美穂・溝渕悠里・山本信乃
5 脚本と楽譜から身体と音楽へ—橋渡しとしての字幕— 岡村睦
6 ピエロの悲劇を奏でる身体 伊藤友子
197 デジタル・メディア時代の芸術研究—データベースとデジタル・メディア環境の整備— 園府寺司
200 中東欧モダニズム・ワークショップ(懐徳堂春季講座) 三谷研爾
204 あとがき 藤田治彦

7 臨床と対話

007 はじめに 中岡成文

009 第1部 臨床哲学から
010 もの・ひと・とき—「臨床と対話」のために 中岡成文
023 予防原則の哲学的考察
—科学技術と社会の新たな倫理的関係の構築のために— 屋良朝彦
035 対話のインセンティブ—子どもたちとの「楽しい」対話のために 高橋綾

049 第2部 NGOと公共的な対話
052 NGOと公共性の問題の一事例
—ネパールのブータン難民キャンプを訪問して— 入江幸男
060 ブータン難民の過去・現在・未来 ラタン・ガズメル

067 第3部 死の臨床をめぐって
068 第1章 アジアにおける死の臨床に関する研究の動向
069 アジアにおける死の臨床に関する心理学的研究 安部幸志・恒藤暁
079 中国人の死生観—死と家族にまつわる視点から— 王健・安部幸志・恒藤暁
084 死の臨床におけるスピリチュアリティ研究の動向—比較文化的観点より—
森田敬史・安部幸志・恒藤暁
093 東アジアにおけるアドヴァンス・ディレクティブの発展と研究の動向
船原徹雄・大橋陽・安部幸志・恒藤暁
102 第2章 遺族支援システムの構築に向けて—医療現場における遺族支援の現状と課題—
104 ホスピス・緩和ケア病棟における遺族支援 坂口幸弘・恒藤暁
111 大阪府下のある公立総合病院における遺族支援 坂口幸弘・恒藤暁
115 遺族支援に対する看護師の意識 坂口幸弘・恒藤暁

123 第4部 記憶と対話
124 記憶、対話、そして集合的な想起 近藤佐知彦
146 記憶の伝承に関するグループ・ダイナミックス 渥美公秀
161 記憶の空間的位相：記憶装置としての博物館に関する一考察 関嘉寛
177 博物館の展示を「見る」という経験 谷本奈穂
189 「記憶と対話」研究に向けて：台湾集集大地震の被災者の語りを踏まえて 加藤謙介
201 「佐伯敏子さんの語り」について：付属資料の解説
207 佐伯敏子さんの語り (本報告書への収録者 諏訪晃一)
242 臨床的災害救援システムの構築に向けて 渥美公秀
255 地域防災プログラムのマニュアルの意義 渡邊としえ
262 あとがき 渥美公秀

8 映像・音響記録DVD

006 まえがき 園府寺司

008 第1部 メディア関連事業についての報告
009 人文学データベース 豊穣な海の創出 園府寺司
014 国際多地点講義・シンポジウム配信システム 前迫孝憲・内海成治・伊井春樹
035 メディア教育とスタッフ 園府寺司

038 第2部 映像・音響記録DVDコンテンツについて
039 映像・音響記録DVDコンテンツ紹介
040 人文学データベース 園府寺司
041 国際多地点講義・シンポジウム配信システム 前迫孝憲・内海成治・伊井春樹
044 国際フォーラム「映像の力—日越両国文化の比較と交流のために」 山口 修・桃木至朗
046 シンポジウム「表演芸術における映像記録化」 山口修
048 第3回国際デザイン史フォーラム「画像と文字」 藤田治彦
050 ヨーゼフ・ラスカ《父の愛》
—20世紀初頭におけるバレエ・パントマイム芸術の再構築に向けて— 根岸一美
051 公開授業「科学技術と倫理」 稲葉一人

053 映像・音響記録DVD仕様

Achievement
「インターフェイスの人文学」関連業績一覧

プログラム採択（2002 年 11 月）以来 2003 年 12 月調査分まで（刊行予定を含む）の、研究に参加した教員、RA、TA、その他研究協力者による研究業績のリストである。「インターフェイスの人文学」報告書所収論文は除く。今回は、1. 編著書、2. 雑誌論文、3. その他論文集等に掲載の学術論文の 3 種を掲載する。グループ別・著者名の 50 音順に配列している。なお、その後の調査に基づく網羅的な業績一覧を別途作成し、冊子として印刷するとともにホームページで公開する予定である。

1. 編著書

著者	書名	叢書名等	出版社・発行者	総頁数	出版年
臨床と対話					
河井隼雄・鷲田清一	『臨床と言葉―心理学と哲学のあわいに探る新しい臨床の知』		TBSブリタニカ	238	2003
歴史学研究会（編） 川北稔他（著）	『歴史学における方法的転回』		青木書店		2002
鷲田清一	『老いの空白』	シリーズ〈生きる思想〉4	弘文堂	252	2003
鷲田清一	『この〈私〉はどこにいるのか』	智山文庫・28	真言宗教智派宗務庁	77	2003
鷲田清一	『課題授業　ようこそ先輩●着飾る自分、質素な自分』		KTC中央出版	201	2004
白幡洋三郎（監修） サントリー不易流行研究所(編)鷲田清一・白幡洋三郎・奥野卓司・小長谷有紀・山極寿一（著）	『大人にならずに成熟する法』		中央公論新社	257	2003
鷲田清一（編著）	『〈食〉は病んでいるか―揺らぐ生存の条件』	ウェッジ選書 14	JR東海	198	2003
シルクロードと世界史					
荒川正晴	『オアシス国家とキャラバン交易』	世界史リブレット 62	山川出版社	82	2003
川北稔・桃木至朗（監修）	『最新世界史図説　タペストリー』		帝国書院		2003
山内晋次	『奈良平安期の日本とアジア』		吉川弘文館		2003
山内晋次・他	『摂関政治と王朝文化』	日本の時代史 6	吉川弘文館		2002
トランスナショナリティ研究					
Koizumi, Junji	*Dynamics of Cultures and Systems in the Pacific Rim: Anthropological Studies*		Osaka University Press	300	2003
李暁傑	《體國經野―中國行政區劃的變遷》		長春出版社		近刊
イメージとしての日本					
伊藤公雄	『「男らしさ」という神話』		NHK出版	123	2003
伊藤公雄	『「男女共同参画」が問いかけるもの』		インパクト出版会	286	2003
金水敏	『ヴァーチャル日本語　役割語の謎』		岩波書店	225	2003
冨山一郎	『暴力の予感―伊波普猷における危機の問題』		岩波書店	366	2002
冨山一郎	『戦場の記憶』（韓国語）		移山出版（ソウル）	303	2002
言語の接触と混交					
真田信治・生越直樹・任榮哲（編）	『在日コリアンの言語相』		和泉書院		2004
真田信治（編）	『20 世紀の日本社会言語学研究文献リスト』（CD-ROM 版）		真田信治		2003
横田睦子	『渡米移民の教育　―某で読む日本人移民社会―』		大阪大学出版会	185	2003
工藤真由美（編）	『ブラジル日系社会における言語の総合的研究』	大阪大学大学院文学研究科紀要（モノグラフ編）	大阪大学大学院文学研究科		2004
映像人文学					
Kashiwagi, Takao	*Balzac, romancier du regard*		Nizet		2002
柏木隆雄（編著）	『バルザックとこだわりフランスちょっと良い旅』		恒星出版		2003
柏木隆雄（共編著）	『エクリチュールの冒険―新編・フランス文学史』		大阪大学出版会		2003
山口修	『応用音楽学と民族音楽学』		東京：放送大学教育振興会		2004
臨床と対話					
稲葉一人	『実践民事訴訟法』		民事法研究会		2003
稲葉一人	『医療・看護過誤と訴訟』		メディカ出版		2003
稲葉一人	『調停技法トレーニング中級』		シヴィル・プロネット関西		2002
屋良朝彦	『メルロ＝ポンティとレヴィナス　―他者への覚醒―』		東信堂		2003

2. 雑誌論文

著者	論文名	雑誌名	巻号	始頁―終頁	学会・出版社等	刊行年
岐路に立つ人文科学						
川北稔	「カリブ海域史への視角」	『日仏文化』	68 号	107–123		2002
三島憲一	「ニーチェ―ヨーロッパへの懐疑とその落とし穴」	『環』	別冊 5 「ヨーロッパとは何か」	356–367	藤原書店	2002

鷲田清一	「強い「自立」よりも弱い「相互依存」を」	『中央公論』	2003年4月号		中央公論新社	2003
鷲田清一	「〈民族〉と〈モード〉」	『民族藝術』			日本民族藝術学会	2004
鷲田清一	「働くことの意味?」	『倫理学研究』			関西倫理学会	2004
トランスナショナリティ研究						
太田心平	「人類学における知識の二元論と再一元化 —韓国朝鮮研究からの理論的鳥瞰」	『年報人間科学』	vol.24	33–48		2003
太田心平	「政治と発話—現代韓国の政治文化を構築する「誤解」」	『民族学研究』	68巻1号	44–64		2003
全京秀(著)太田心平(訳)	「日本の植民地／戦争人類学はいま —台北帝大と京城帝大の人脈と活動を中心に」	『思想』	957号		岩波書店	2004
亀山俊朗	「社会政策の変容とシティズンシップのゆくえ」	『年報人間科学』	第24号	251–268		2003
樋口明彦・亀山俊朗	「若年無業・不安定就労者の自立支援事業の調査研究—大阪地域職業訓練センターの現状と課題」	『季刊家計経済研究』				2004(掲載予定)
三島憲一・木前利秋(共訳)	「J・ハーバーマス「コミュニケーション的行為と理性の脱超越論化」上・下」	『思想』	No.954			2003
木村自	「移民と文化変容—台湾回民社会における聖紀祭礼の変遷と回民アイデンティティ」	『年報人間科学』	vol.24	49–65		2003
後藤正憲	「結核と革命」	『スラヴ研究』	第50号	269–283		2003
後藤正憲	「社会主義と結核—ソビエト・ロシアの身体的構築」	『人間科学研究』	第5号	209–218		2003
田中雅彦	「メキシコ農地改革における一村落の指導者をめぐる語り」	『ラテンアメリカ研究年報』	第24号			2004
中井潤子	「ビルマのヒンドゥー教徒の農村から都市への移動」	『国際文化学』	8号	149–157		2003
中井潤子	「ビルマの南アジア系移民のホスト社会への「適応」」	『ぽぷらす』	2号	1–22		2003
中川敏	「「宗教とは何か」とは何か」	『民族学研究』	68巻2号	262–279		2003
樋口明彦	「現代社会における社会的排除のメカニズム—積極的労働市場政策の内在的ジレンマをめぐって」	『社会学評論』	217			2004
松川恭子	「私のことば、あなたのことば—「母語」という文化的装置と言語ナショナリズムを巡って—」	『年報人間科学』	vol.24	67–86		2003
高橋巌根	「「弱いナショナリズム」の形成と展開—ウズベキスタンにおける民族・歴史・国家」	『人間科学研究』	第5号	197–208		2003
金子えりか・山田仁史(訳・解説)	Wiedfeldt, Otto ヴィートフェルト、O「小特集・ヴィートフェルトの台湾原住民研究」	『台湾原住民研究』	7	3–95		2003
李暁傑	〈戦國時期魏國疆域變遷考〉	〈歷史地理〉	第一九輯	74–88	上海人民出版社	2003
李暁傑	〈戦國時期趙國疆域變遷考述〉	〈九州〉	第三輯	147–171	商務印書館	2003
イメージとしての日本						
表智之・伊藤遊	「大学ポップ化計画—大阪大学ポピュラーカルチャー研究センターの展望—」	『マンガ研究』	第4号	140–148	日本マンガ学会	2003
伊藤公雄	「学術の再点検—男性学／男性研究の視点から」	『学術の動向』	2003年4月号	20–23	日本学術会議	2003
伊藤公雄	「バックラッシュの構図」	『女性学』	第11号	10–21	日本女性学会	2004
言語の接触と混交						
中東靖恵・Leonardo A. de P. MELO	「ブラジル日系社会における言語の総合的研究へ向けて(1)」	『岡山大学文学部紀要』	第39号	67–82		2003
山東　功	「ブラジル日系人の日本語への視点」	『女子大文学(国文篇)』	54		大阪女子大学人文社会学部日本語日本文学専攻紀要	2003
DEMARTINI, Zelia de Brito Fabri	Relatos orais de famílias de imigrantes japoneses: Elementos para a história da educação brasileira	Educação & Sociedade	ano XXI, n. 72,	43–72		2000
DEMARTINI, Zelia de Brito Fabri & ESPÓSITO, Yara Lúcia	"São Paulo no início do século e suas escolas diferenciadas"	Ciência e Cultura (Revista da Sociedade Brasileira para o Progresso da Ciência)	41(10)	981–995	São Paulo	1989
映像人文学						
柏木隆雄	「バルザック『シャベール大佐』におけるまなざし」	『関西フランス語フランス文学』	第9号			2003
図府寺司	「ファン・ゴッホ展覧会史　作品移動、市場、メディアから見た美術研究への序論」	『西洋美術研究』	10号			2004
篠田暁子	「民族芸能が生まれる時—バリの芸能《ケチャ》の場合—」	『民族藝術』	第20巻		民族芸術学会	2004
藤田治彦	「英国の文化財保護：ナショナル・トラストと古建築物保護協会」	『民族藝術』	第19巻	50–54	民族芸術学会	2003
藤田治彦	「アーツ・アンド・クラフツと工芸の変貌—ウィリアム・モリスと柳宗悦をめぐって」	『美学』	第213号	14–26	美学会	2003
Fujita, Haruhiko	"L' AGONIA DEL MONTE"	Parametro	Vol. 245	36–37	Parametro, Bologna	2003
山口修	「耳から口へ、口から耳へ、そして音楽」	『イキイキ音楽療法のしごと場』	2	104–107	東京：あおぞら音楽社	2003
臨床と対話						
赤林朗・稲葉一人	「生命・医療倫理の現状と将来」	『医学のあゆみ』	196巻2号	165–168		2001
渥美公秀	「語りのグループ・ダイナミックス」	『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』			大阪大学大学院人間科学研究科	2004
渥美公秀	「台湾集集地震における救援活動の記録」	『ΣYN(ボランティア人間科学講座紀要)』	vol.4(2)	243–254	大阪大学大学院人間科学研究科ボランティア人間科学講座	2003
渥美公秀	「災害時のボランティア活動と自治体」	『地方議会人』	33(11)	27–30	中央文化社	2003
稲葉一人	「がんのICと倫理」	『別冊ターミナルケア』	13巻3号	178–185	青海社	2003
稲葉一人・長尾典子	「模能する病院内臨床倫理委員会」	『看護管理』	13巻4号	263–268	医学書院	2003
稲葉一人	「医療における意思決定—終末期における患者・家族・代理人」	『医療・生命と倫理・社会』	2号	34–51	大阪大学大学院医学系研究科・医の倫理学教室	2003
稲葉一人	「食べることと法」	『臨床哲学』	4号	46–61	大阪大学文学研究科臨床哲学	2002
稲葉一人	「遺伝子情報を巡る倫理的・法的諸問題」	『医療・生命と倫理・社会』	1号	76–85	大阪大学大学院医学系研究科・医の倫理学教室	2002
稲葉一人・赤林朗	「疫学と個人情報保護を巡る倫理と法との交錯」	『生命科学』	12巻B	23–33		2002
稲葉一人・長尾典子	「神経幹細胞の応用の倫理問題」	『Clinical Neuroscience』	別冊20巻1号	102–108	中外医学社	2002
加藤謙介	「台湾集集大地震における被災者の語り—「記憶と対話」研究に向けた予備的考察」	『ΣYN(ボランティア人間科学紀要)』	vol.4(2)	357–366	大阪大学大学院人間科学研究科ボランティア人間科学講座	2003
諏訪晃一	「「総合的な学習の時間」における「自己」と「語り」—松原市立布忍小学校の実践から—」	『ΣYN(ボランティア人間科学紀要)』	vol.4(2)	391–416	大阪大学大学院人間科学研究科ボランティア人間科学講座	2003

関嘉寛	「博物館という空間」	『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』			大阪大学大学院 人間科学研究科	2004
関嘉寛	「記録と記憶の伝承―『臺灣總督府　昭和十年臺灣震災誌』解題―」	『ΣYN（ボランティア人間科学紀要）』	vol.4	243–254	大阪大学大学院 人間科学研究科 ボランティア人間科学講座	2003
中岡成文	「〈精神の力〉としての権利―ヘーゲルのRecht論に寄せて」	『倫理学研究』	第 33 集	31–44	関西倫理学会	2003
中岡成文	「表現と制作―西田幾多郎と三木清のディルタイ批判」	『ディルタイ研究』	第 14 号	5–18	日本ディルタイ協会	2003
Yamanaka, H.	"Scandal and Psychiatry iin early nineteenth-century Prussia"	History of Psychiatry	14(2)	139–160		2003
屋良朝彦	「言葉における存在の彼方　―メルロ＝ポンティ・デリダ・レヴィナスの思考をもとに―」	『哲学』	第 38 号	19–36	北海道大学哲学会	2002
◆メディア						
今井亜湖、山城新吾、松河秀哉、山田雅行、前迫孝憲、芝尾光儀、奥地耕司、伊原和夫	「インターネットを媒体とした超鏡(HyperMirror)システム利用の試み」	『教育システム情報学会誌』	Vol.19 No.4	261–266	教育システム情報学会	2002
松下幸司、今井亜湖、前迫孝憲、堵岡靖司、吉冨友恭	「動画像デジタルコンテンツが児童の学習活動に与える効果に関する一研究」	『教育システム情報学会誌』	Vol.19 No.4	267–271	教育システム情報学会	2002
吉冨友恭、堵岡靖司、今井亜湖、松下幸司、前迫孝憲	「河川生態系に対する児童の意識調査に基づいた環境学習のカリキュラムデザイン」	『日本教育工学会誌』	Vol.26, Suppl.	187–192	日本教育工学会	2002
吉冨友恭、吉田　健、松下幸司、前迫孝憲	「利用者による評価・検証を組み込んだ展示開発―河川に関する研究解説パネルを例に―」	『環境システム研究論文集』	Vol.30	391–400	土木学会	2002
吉本優子、武藤志真子、前迫孝憲	「食生活の自己管理に対する自己効力感尺度の開発に関する研究」	『Health Sciences』	Vol.19 No.2	99–111	The Japan Society of Health Sciences	2003
松河秀哉、重田勝介、吉田　健、前迫孝憲、景平義文、関　嘉寛、内海成治、中村安秀、下條真司、井上聡一郎、中村一彦、下山富男、吉田雅巳	「アフガニスタン―大阪間の遠隔講義の国際配信」	『日本教育工学会論文誌』	Vol.27, Suppl.	255–259	日本教育工学会	2003
加藤俊徳、小池敏英、前迫孝憲、雲井未歓、大川佳美、成　基香、渡邊流理也	「高選択性近赤外分光機能画像法NIRS-Imagingによるブローカ野の脳血流動態と局在化に関する検討」	『臨床脳波』	Vol.46 No.1	20–32	永井書店	2004

3.その他論文集等に掲載の学術論文

著者	論文名	編者等	書名	叢書名等	始頁―終頁	出版社	出版年
岐路に立つ人文科学							
三島憲一	「原理主義的のナショナリズムの陥穽―西尾幹二氏は原理主義者だから、議論の負けは認めない」	菅原憲二、安田浩（編）	『国境を貫く歴史認識』		80–112	青木書店	2002
Mishima, Kenichi	"Generationswechsel und Erinnerungskulturen in Japan"	Cornelißen, Christoph, Klinkhammer, Lutz und Schwentker, Wolfgang(hg.)	Erinnerungskulturen, Deutschland, Italien und Japan seit 1945		344–358	Frankfurt (Fischer Taschenbuchverlag)	2003
Mishima, Kenichi	Ästhetisierung zwischen Hegemoniekritik und Selbstbehauptung	Amelung, Ivo, Koch, Mathias, Kurtz, Joachim, Lee, Eung-Jeung, Saaler, Sven(hg.)	Selbstbehauptungsdiskurse, in Asien - China, Japan, Korea		25–48	München	2003
三島憲一	『世界周航記』と啓蒙の再読		ゲオルク・フォルスター『世界周航記』下 巻			岩波書店	2003
鷲田清一	「臨床と言葉」	文部科学省補助金科学研究費報告書	「看護の現象学的研究」		106–121		2003
鷲田清一	「流行」	中島義明・太田裕彦（編）	「人間科学の可能性」			放送大学教育振興会	2003
鷲田清一	「意識の皮膚」	成実弘至（編）	「身体モード論」		36–61	京都造形芸術大学通信教育部	2003
鷲田清一	「意識の皮膚」	京都造形芸術大学（編） 成実弘至（責任編集）	「身体モード論」		36–61	角川書店	2003
シルクロードと世界史							
佐藤貴保	「西夏関連研究文献目録　2000 年度版」		『瀚海蒼茫―ユーラシア歴史学の構築をめざして―』		1–79	総合地球環境学研究所	2003
桃木至朗	「東南アジア史研究の過去・現在・未来」	石井米雄ほか（編）	「岩波講座東南アジア史別巻　東南アジア史研究案内」		1–14	岩波書店	2003
桃木至朗	「東南アジア史整理のポイント」		「歴史と地理」561	世界史の研究 194	1–11	山川出版社	2003
桃木至朗	「注目の一冊 3　東南アジア的王権論」	石井米雄ほか（編）	「岩波講座東南アジア史別巻　東南アジア史研究案内」		27–32	岩波書店	2003
桃木至朗	「注目の一冊 12　「交易の時代」以後の東南アジアと朝鮮」	石井米雄ほか（編）	「岩波講座東南アジア史別巻　東南アジア史研究案内」		67–71	岩波書店	2003
Moriyasu, Takao	"Uighur Inscriptions on the Banners from Turfan Housed in the Museum fur Indische Kunst, Berlin."	Chhaya Bhattacharya-Haesner	Central Asian Temple Banners in the Turfan Collection of the Museum fur Indische Kunst, Berlin		461–474	Berlin, Dietrich Reimer Verlag	2003
Yoshida, Yutaka	"In search of traces of Sogdians 'Phoenicians of the Silk Road'"		Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften. Berichte und Abhandlungen, Band 9		185–200		2002
Yoshida, Yutaka	"Chamuk: A name element of some Sogdian rulers"	D. Durkin-Meisterernst (ed.)	Turfan revisited: The first century of research into the arts and cultures of the Silk Road			Berlin	2003
トランスナショナリティ研究							
太田心平	「일본의 지역활성화 사례 (日本における地域活性化の事例)」	オンス近代生活村運営委員会（編）	『オンス生活村基礎調査報告書』		151–187		2002
太田心平	「過去を養う―清渓川とソウルの寄せ場から」	韓国・朝鮮文化研究会（編）	『韓国朝鮮の文化と社会』2 巻		309–314		2003
春日直樹	「物語ること」	森明子（編）	「歴史叙述の現在」		196–220	人文書院	2002

Kasuga, Naoki	"A Micro Island State and its Indigenous Culture in the Age of Global Capitalism"	Koizumi, J., (ed.)	Dynamics of Cultures and Systems in the Pacific Rim: Anthropological Studies		155–171	Osaka University Press	2003
春日直樹	「公正の「難床」」	三浦徹・岸本美緒・関本照夫（編）	『比較史のアジア―所有・契約・市場・公正』		263–280	東京大学出版会	2004
栗本英世	「9・11 事件とアフリカ―ソマリアとスーダン」		『地域研論集』（特集:「9・11」以降、世界は変わったのか）5 巻 1 号		82–85		2003
Koizumi, Junji	"Economic Change and Cultural Constancy: Migrant Labor, Coffee Production and Communal Identity in Huehuetenango, Guatemala"	Koizumi, J., (ed.)	Dynamics of Cultures and Systems in the Pacific Rim: Anthropological Studies		243–272	Osaka University Press	2003
Dereje, Feyissa	"The Socio-economic Status of Artisans among the Oyda of Southern Ethiopia"	D. Freeman & A. Pankhurst (eds.)	Peripheral peoples: the excluded minorities of Ethiopia			London: Hurst and co.	2003
Dereje, Feyissa	"Conflict and Identity politics: The Case of Anywaa-Nuer Relations in the Gambela Region"	G. Schlee and E. Watson (eds.)	Changing identification and alliances in Northeast Africa			to be published by James Currey	近刊
Dereje Feyissa and Schlee, G.	"Fulbe Migrations to the Sudan and Ethiopia"	G. Schlee and E. Watson (eds.)	Changing identification and alliances in Northeast Africa			to be published by James Currey	近刊
Dereje, Feyissa	"Ethnic Federalism and Conflicting Political Projects: The Case of Anywaa-Nuer Relations in the Gambela Region"		Proceedings of the 15th international conference on Ethiopian studies			to be published by University of Hamburg	近刊
Dereje, Feyissa	"Contesting Autochthony: Strategies of Land Entitlement among the Nuer of the Gambela Region"	Dafinger and Barends (eds.)	The Landed and the landless: Strategies of Territorial Integration and Dissociation in Africa			to be published in Africa (Special Issue)	近刊
Dereje, Feyissa	"Land and the Politics of Identity, the Case of Anywaa-Nuer Relations in the Gambela Region, Western Ethiopia"	Evers and Spierenburg (eds.)	Competing Jurisdictions: Settling Land Claims in Africa			to be published by Brill Academic publishers	近刊
Dereje, Feyissa	"Decentralisation as Ethnic Closure: The Experience of Ethiopia"		Decentralisation and Development, Journal of Africa Development			to be published by CODESRIA	近刊
Nakagawa, Satoshi	"On the Endenese Labour Migration to Malaysia."	Koizumi, J., (ed.)	Dynamics of Cultures and Systems in the Pacific Rim: Anthropological Studies		35–49	Osaka University Press	2003
山田仁史	「華南・東南アジアの洪水神話におけるヒョウタン」	篠田知和基（編）	「捕陀落渡海　死への船出：東西の説話から」		74–83	広島：GRMC	2003
山田仁史	「環太平洋における神話の共通性：研究史の素描」	篠田知和基（編）	「神話・象徴・文学」III				近刊
山田仁史	「解説　サイシャット族の神話伝説と祭典について」		「賽夏族趙旺華遺稿集　祭典・伝説編」				近刊
山田仁史	「台湾原住民における命名、連名制と死者への態度：サイシャット族の事例から」		「1999 台灣原住民國際研討會論文集」（仮題）				近刊
李暁傑	《十九世紀早期在華傳教士所描繪的美國：高理文及其《美理哥合省國志略》		《〈古代中外關係：新史料的調、整理與研究）國際學術研討會論文集》			科學出版社	近刊
イメージとしての日本							
伊井春樹	「国際化のなかの日本文学研究」		「異文化理解の視座」			東京大学出版会	2003
伊藤公雄	「戦後男の子文化のなかの「戦争」」	中久郎（編）	「戦後平和のなかの戦争」			世界思想社	2004
伊藤公雄	「高齢社会と「男性問題」」	清水博子（編）	「夫は定年、妻はストレス」		267–280	青木書店	2003
Tomiyama, Ichiro	"The 'Japanese' of Micronesia, "	Ronald Y. Nakasone(ed.)	Okinawan Diaspora		57–70	University of Hawaii Press	2002
冨山一郎	「国境」	小森陽一・千野香織・酒井直樹・成田龍一・島薗進・吉見俊哉（編）	『日本の文化史 4　感性の近代』		207–231	岩波書店	2002
冨山一郎	「世界市場に夢想される帝国」	豊見山和行（編）	『日本の時代史 18　琉球・沖縄史の世界』		267–288	吉川弘文館	2003
冨山一郎	「対抗と迴行」（中国語）		「中外文学」（台湾大学）第 31 巻 7 期		33–62		2002
言語の接触と混交							
Tsuda, Aoi	"Language, Culture and Ethnicity of the Bonin Islands, Japan"		Changing Japanese Identities in Multicultural Canada		103–111	Canada:University of Victoria Press	2003
Tsuda, Aoi	"Persuasive Discourse:Homiletics on Easter in Japanese and American Catholic Speech Communities"		Approaches to Style and Discourse in English		225–236	Osaka ; Osaka University Press	2004
DEMARTINI, Zelia de Brito Fabri	"Escolas Japonesas em São Paulo: elementos para a história da educação brasileira"		Evento comemorativo dos 90 anos da Imigração Japonesa no Brasil		3–22	São Paulo: Faculdade de Educação/USP	1998
KREUTZ, Lúcio	"A educação de imigrantes no Brasil"	LOPES, Eliane Marta Teixeira et al (org.)	500 anos de Educação no Brasil		347–370	Belo Horizonte: Autêntica, 3 ed.	2003
映像人文学							
柏木隆雄	「バルザックと馬琴」		『獨協大学国際フォーラム 2001 年度報告書』				2002
柏木隆雄	「ゾラ、紅葉、花袋　―日本近代小説への道―」		『環』			藤原書店	2003
圀府寺司	「モンドリアン　新しい世界の幻視者」	永井陸則（編）	『越境する造形―近代の美術とデザインの十字路』		148–162	晃洋書房	2003
臨床と対話							
稲葉一人	「倫理概論」		『MR 継続教育テキスト』II 8-36			エゼルビア・サイエンス㈱ミクス	2003
稲葉一人	「生命倫理と科学技術の社会的な規制」		『生命科学と現代社会』第 5 巻	生命科学のための基礎シリーズ	243–254	実教出版	2002
Yamanaka, H.	"How Scandal made a Psychiatrist: the Socialization of medical practice in the early nineteenth century"	Hamanaka & Berrios (eds.)	Two Millenia of Psychiatry in West and East		155–164	Gakuju Shoin	2003
Yamanaka, H.	"Ownership of Human Biological Materials in the Age of Biotechnology"		Background, History, and Practice in the United States and Japan, Empirical Bioethics in Cultural Context: Genetic Confidentiality, Ownership and Public Participation in the United States and Japan		74–90	Department of Science & Technology Studies, Cornell University & Institute of Comparative Culture, Sophia University	2003

全国高等学校世界史教員研修会報告

山内晋次

森安孝夫教授を代表とする、われわれ「シルクロードと世界史」班は、本COEプログラムにおける主要な研究目標として、

- 陸と海のシルクロード関係史料の収集・公開・分析と、多言語史料・映像資料を統合した新しい「世界史」研究法の構築
- 上記の研究を中核とした最新の歴史学による、高校世界史教育を刷新する方法の開発・実践

の二つを掲げている。そして、後者の研究目標の実現のために、大学の研究現場と高校の教育現場との対話・連携の場という、まさに「インターフェイス」の場を創出すべく、昨夏、全国の高等学校世界史教員を対象とする研修会を開催した。

現在の日本の社会人の世界史認識においては、高校時代の世界史教育とその延長線上にある受験世界史が基本的な枠組みとなっている場合がほとんどであると考えられる。しかし、現在の世界史教育は、ヨーロッパや中国を「中心」・「勝者」とする史観の呪縛を強く蒙っているといわざるをえない。そこで、本研修会では、このような歴史の見方からの脱却を主要な目的の一つとし、従来の史観では「周辺」・「敗者」としかみなされていない「中央ユーラシア」・「東南アジア」地域の歴史や「海域史」の分野を主題にすえ、公平・対等な立場にたった世界史研究の最前線の成果を提示しようとした。

また、われわれは、現在の日本の歴史教育における大きな問題点として、大学の研究現場と学校の教育現場とをとり結ぶ者の層の薄さを痛感している。そしてこのような状況のなかで、高校教員こそが、この重要な役割を担うべき高度職業人であると認識している。そこで、われわれは、本研修会のもう一つの主要目的を、このような重要な立場にある高校教員と対話しつつ新たな世界史教育を創造していくための場の確保と継続という点においた。

研修会の概要

本研修会は、二〇〇三年八月五日から七日にかけて、大阪大学附属図書館本館を会場とし、北は岩手県から南は福岡県までの高校世界史教員七二名の参加を得て開催された。三日間の研修会は、大阪大学の教官を主要メンバーとする講師陣七人による以下のような講義と、各講義終了後における質疑応答を中心に進められた。また、一日目と二日目の研修終了時に、参加教員に質問表を配布し、翌日その質問に講師や大学院生が口頭・レジュメで回答するというかたちでも意見交換がはかられた。

森安孝夫（大阪大学大学院文学研究科教授）
「世界史上における中央ユーラシアの意義 ―早すぎた征服王朝としての安史の乱―」

桃木至朗（大阪大学大学院文学研究科教授）
「現代世界とあたらしい歴史学・歴史教育」

「東南アジア史の枠組みを教える方法」
川北稔（大阪大学大学院文学研究科教授）

「ヨーロッパとアジア―近代世界史のパースペクティヴ―」
荒川正晴（大阪大学大学院文学研究科教授）

「シルクロード上のソグド人」
白須浄眞（比治山大学講師）

「新しい世界史教育の創造をめざして」
山内晋次（大阪大学大学院文学研究科COE特任教員）

「遣唐使途絶後の日本とアジア ―九～一三世紀のヒト・モノの交流―」
杉山清彦（日本学術振興会特別研究員）

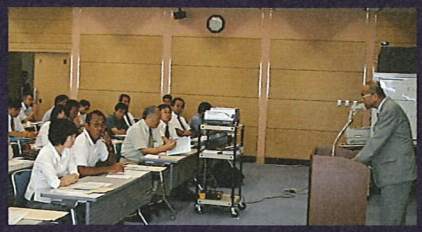
「清帝国と海域アジア・内陸アジア―世界史上の一六～一八世紀―」

各講義終了後の質疑応答や質問表では、冊封体制論、遊牧国家の構造、「民族」の定義・具体像、アジアの海域ネットワーク、ソグド人の商業ネットワーク、歴史を学ぶことの意味、歴史学が歴史教育に提示するものなどのさまざまな問題をめぐって、各講師と参加教員との間で積極的な意見交換が行われた。そして、全講義の終了後、講義内容以外のさまざまな問題も含めた総合討論が行われ、世界システム論、「民族」・「国家」の定義、シルクロードのネットワーク、高校世界史教育の課題などの問題を中心に、活発な討論が展開された。

研修会の成果

三日間にわたる研修会の終了後、参加教員に一〇〇〇字程度のレポートを提出してもらった。以下、おもにそのレポートによりながら、本研修会の成果を概括してみたい。

レポートのなかでは、「高校の教育現場と大学の研究の場との乖離の緩和が歴史教育の課題の一つとなっている」という声に代表されるように、研究と教育の現場が大きく乖離しているという問題が、多くの教員によって指摘されている。本研修会の主要目的の一つは、上述のように、このような状況に対して、両者の直接対話の場を確保し、



最先端の研究成果を提供することにより、少しでもその溝を埋めるというものである。また、双方の場をつなぐ「層としての新たなリーダー」となりうる意識の高い高校教員と積極的な意見交換をはかることも大きなねらいの一つである。

このような本研修会の目的は、幸いに多くの参加教員に明確に理解され、「歴史研究の現場と歴史教育の現場とが、双方向で、結ばれた非常に価値のある研修会でした」、「最先端の研究紹介を通じ教育現場に一石を投じる、まさに流行の産学連携の人文科学版で教学連携とも呼ぶべき斬新なものであった」というような声にみられるように、多くの教員から共感の声が寄せられている。そして、「大学からは高校教員に対し、学問の成果をもっと発信して欲しいと思います。高校での教育と大学の研究の格差はあって当然ですが、高校の世界史の教員はその狭間を埋める存在でありたいと思っています。（中略）顔を突き合わせ同じ場を共有し研究成果を語り合う場は絶対必要です。この研修の来年度以降のさらなる発展を願います」というような、来年度以降もこの対話の場を継続してほしいという強い要望の声が数多く届けられている。

また、先述のように、われわれは本研修会のもう一つの重要な目的として、旧来の西洋・中国中心史観からの脱却を掲げた。そして、「中央ユーラシア」・「東南アジア」・「海域史」などを講義主題に据え、世界システム論やネットワーク論などを援用しながら、積極的に斬新な世界史像を提示した。参加教員のレポートでも、「今回の研修を通して、いかに私自身が西欧中心主義の歴史観にとらわれてきたのか、あるいは「強者」「勝者」の側（これについても疑念を抱き始めたが）からの歴史観で単元を構築してきたのかを知らされる機会となった」、「三日間の集中講義をうけて端的に示されたのは、ヨーロッパ中心主義的な発想から抜け出し、また一国史的な見方から脱却することによって従来の「世界史」認識を転換させねばならないということであった。そしてそれをいかに歴史教育の場でおこなっていくか、これがこのセミナーから高校の教員側に与えられた課題であった」というような声が多数寄せられており、このような新たな「世界史」像の提示も、多くの教員に大きな刺激を与えたことがうかがわれる。

以上のような点以外にも、本研修会における講義・討論を通じて、日本史と世界史の接点の具体的提示、海域史からの日本史の見直し、柔軟で弾力的なヒトやモノの動きの紹介、モノの動き・消費の視点から歴史のダイナミズムを考える手法、教科書的理解の大胆な見直しなどの点で、研究の最前線からおおいに刺激を受けたと多くの教員が回答している。

以上のように、今回われわれが企画・開催した全国高等学校世界史教員研修会は大きな共感と反響をもって迎えられ、初回の試みとしては充分な成果をあげることができたといえるであろう。今回の参加教員の一人からは、「今、三〜四人が中心となって、この研修に参加したもの同士の勉強会のようなものを大阪で作ろうと考えています。せっかくの機会を何とか生かし、その成果を報告できるように頑張ろうと思っています」というような、高校教育現場における新たな動きもレポートされてきている。このような教育現場における新たな動きとも連携しつつ、今回われわれが創り出した大学の研究現場と高校の教育現場との接点をよりいっそう確実に保持・継続していくために、次年度以降、さらに研究プロジェクトを推進していきたい。（本研修会のより詳しい内容については、大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」発行のCOE報告書『シルクロードと世界史』（二〇〇三年一二月）をご参照いただきたい。）

山内晋次（やまうち・しんじ）

1961年生まれ。1993年大阪大学大学院文学研究科単位取得退学。
1997年博士（文学）。日本学術振興会特別研究員を経て、現在21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」特任教員。専門は日本古代対外関係史、アジア海域史。主たる著書として、『奈良平安期の日本とアジア』（吉川弘文館、2003年）など。

現代を測る

市民と文化財のはざまで

伊藤聖浩

現在、私は羽曳野市教育員会に勤務している。二〇〇四年三月でまる十五年になる。いわゆる中堅という立場になるのであろうか。当初は市内の文化財保護、とりわけ開発工事に伴う緊急発掘調査に携わっていた。それを十二年間ほど続けた後に、現在の生涯学習の部署に異動し、市民講座の企画や事務を担当している。学部のときから考古学を専攻していたので、埋蔵文化財の発掘については、自分の専門を活かして仕事ができる、少なくとも最初そう考えていた。しかし、やはりというか、現実はそうあまくは無かったのである。

羽曳野市では市域の四〇%強が「周知の埋蔵文化財包蔵地」と呼ばれる、法的に保護の対象となる範囲が指定されている。この範囲で土木工事を行う場合は、届出を行う必要がある。私は、特に個人専用住宅の建て替えに伴う発掘を担当していた。正直いって、これは本当に大変な作業であった。なぜなら、個人住宅の発掘は一般には国庫補助金を使うのだが、その申請から実績報告、交付決定に至るまでの事務的手続き書類の作成を、担当者一人でほとんど仕上げなければならないからである。また、発掘作業員やアルバイトの賃金、機械借り上げなどの経費の伝票処理も行うといった始末である。最も手ごわいのが、工事施主や施工業者との折衝である。この協議内容をもとに発掘調査に着手するのだが、価値観の異なる立場での協議は、予想通り難航することがしばしばである。その後首尾よく発掘に突入しても、現場で発生する土ぼこりや泥水で、付近住民より苦言を呈される場合も多々ある。発掘やその後の遺物整理作業はもちろんのことだが、これら調査研究の前提となる上記の業務には、それ以上の精力を注ぎ込むことになる。

このような繰り返しに、率直なところ面食らい、とまどいの連続であった。大学で学んだ考古学研究の知識は、今やっている業務の中でどれくらい有益なものなのであろうか、はたと真剣に考え込んでしまうほどであった。一方で、考古学・古代史ブームといわれ、一般市民の関心も高く、その結果新聞やテレビなどのマスコミにも取り上げられることも多い。にもかかわらず、このギャップは一体なぜなのか。大学入学当時に指導教官の一人から「歴史学は、法学や経済学などと違って鍋や釜のように日常生活には直接役に立たない。しかし、歴史学を研究する者は、普段歴史学の学問を行わない人たちに代わって、研究してその成果を他の多くの人びとに還元していく必要がある。農業や工業に従事する人が、それに直接携わらない人の分の農作物や製品をも生産するように。」といわれたことを、ふと思い出してしまった。

悪戦苦闘の中、小学校の授業の一環で、市内の遺跡の解説を行ったことがある。お世辞にも上手くできたとは思わなかったが、関心をもった数人の子供たちが発掘整理事務所にやってきた。もっと、モノ（遺物）を見たいのだという。この授業では約一六〇〇年前の埴輪の実物資料を見てもらったのであるが、どうやら本物に興味を持ったようであった。また、これらの遺物が普段自分たちが遊び場としている古墳から出土したものであることも、彼や彼女等にとってはちょっとした発見のようであった。このときに次のように思った。もちろん、遺跡のもつ歴史的意義の重要性を訴える必要がある。しかし、それだけでは不充分で、何か別の付加価値を創出しなければいけない。例えば、古墳の

伊藤聖浩（いとう・まさひろ）
1965 年生まれ。1988 年岡山大学文学部史学科卒業。羽曳野市教育委員会に勤務、また羽曳野市教育委員会市民大学の主査を勤める。大阪大学大学院文学研究科博士前期課程在籍、考古学講座に所属。共著として『羽曳野市史』第 3 巻資料編 1（羽曳野市史編纂委員会、1994 年）。

墳丘の雑木林や周濠を利用した周遊散策路の設定、そこでの動物や昆虫あるいは植物を対象にした自然観察が自由にできる場の提供、遺跡の広場空間を利用した音楽コンサートの開催など。私の乏しい経験では、市民にとっては、むしろ良好な住環境の保全、あるいは気軽に楽しめる文化イベントへの参加という脈絡から、歴史的遺産に興味や関心を抱く事例が多いように思う。これには、考古学や古代史のみならず、文学、芸術学、生物学、植物学、はたまた環境学や都市計画といった他の学問分野との連携の必要を痛感した。

現在の生涯学習の仕事を通しても、おもしろいことに気がついた。土地柄もあるのであろうか、やはり考古学や古代史に関する内容の講座は人気が高い。しかも、年輩の、つまり仕事を定年退職された方がほぼ大半を占める。このような傾向は、どこの市民講座などにも見られるようである。これにはさまざまな理由があるが、私が気になったのは次のようなことである。こういった方々は、自分の居住している地域には多少の関心を持ちながらも、実はあまり知らない。中には市民ホールなどの公共施設などの場所もわからない、といった具合もある。それはなぜか。現役のときに地元の風景を目にする機会といえば、仕事場所と自宅との間の行き帰りのみというのが案外多かったのである。こういう人たちは、「自分の住んでいる周辺に何があるのか」という好奇心から、この地域に特徴的なもの、固有のもの、有名なもの、さらに本物が実存すれば、より一層の関心を示す。この特徴的・固有なものが、実は古墳や遺跡といった文化財なのである。一過性のトピックスみたいなものばかりではなく、歴史的意義を踏まえた解説や適切な誘導があれば、予想以上に興味を持ってもらえることを確信した。ただ、これなども、受講料を支払って参加するという、それなりに意識の高い一部の人々に限ってのことかも知れない。しかし、こういった潜在的サポーターがまだまだたくさん存在する可能性があることには、少しうれしい気がする。

これからの課題として、やはり若い年齢層に対するアピールの方法が挙げられる。これといった妙案を持ち合わせている訳ではないが、先述した小学生の事例のように、実物資料、本物を直接観察できる機会を設けていければと思う。現地での見学、遺物出土状況など、等身大に歴史と接することのできる場を増やしていきたい。また、この年齢層が高い関心を示す一つとして、都市景観がある。最近では、歴史的景観を見直そうという動きがさかんである。新たに開発されたベイエリアよりも、むしろ神戸の旧居留地をはじめ、大阪天満の木造町家をリニューアルしたカフェに新鮮さを感じる若者が多いという。これなども歴史的建造物に新しい価値を付加していった事例である。こうなったら、文化財の活用について、極端にいえば何でもありという感じになるかもしれない。それくらいの雰囲気を作り上げることができれば、しめたものだと思う。そのときに、行政の考えを押し付けるのではなく、支援する形で関与すべきである。こういうことを考えながら、今しばらくは生涯学習の業務に携わっていきたい。

フィールドのさわめき

サイデンステッカー氏との座談会
『源氏物語』翻訳者としての日本文学観

伊井春樹

エドワード・G・サイデンステッカー氏は、『源氏物語』の翻訳とともに、谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫の作品など近代文学の翻訳も多数手がけ、とりわけ川端作品はそれによってノーベル文学賞を受賞したことは広く知られているであろう。ストックホルムでの川端の受賞記念講演「美しい日本の私」は、直前まで原稿ができなく、現地でも手直しをしたようで、古典をふんだんに引用した、川端独特のあいまいな表現をしているだけに、その英訳には困難をきわめたらしい。なお、講演文とその翻訳は、講談社現代新書（一九六九年）に収められている。

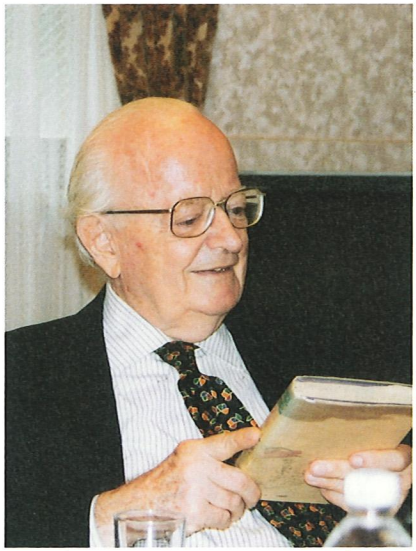
サイデンステッカー氏と知り合ったのは、もう二十数年以前、私がまだ東京に住んでいたころであった。『源氏物語』の千百ページからなる二冊本の翻訳が出版されたのは一九七五年なので、その数年後につき合うようになったらしい。イギリスのアーサ・ウェイリー訳が出たのは一九三三年、それから四十数年ぶりの快挙であった。ウェイリー訳によって世に『源氏物語』の存在が明らかになり、翻訳のすばらしさもあって絶賛され、世界文学として認知されることになる。ただ、ウェイリー訳は鈴虫巻を削除したり、部分的に省略するなど、全訳というわけではなかった。できるだけ原作に忠実に、全巻を翻訳したのがサイデンステッカー氏であり、現在でもアメリカではソフトカバー本が書店に並べられているように、世界における『源氏物語』の普及には大きな功績があった。

「インターフェイスの人文学」では、私は日本文学の翻訳論を一つのテーマとし、国際集会などを開催するなどしてきたが、日本文学の翻訳と研究の先駆者でもあるサイデンステッカー氏から直接話を聞くことを計画した。戦後から今日まで感じたこと、とりわけ『源氏物語』の翻訳事情や、作品論をうかがって記録しておこうと思いたったのである。数年前の朝日新聞のサイデンステッカー氏へのインタビュー記事に、自叙伝を執筆していることが写真入りで掲載されたことがあり、その出版を心待ちにしていた。昨年「Central Tokyo」として完成し、日記を用いながら、祖父の代からコロラドでの生活、海軍日本語学校時代、戦後はアメリカ国務省外交官として日本勤務、その後退職して東京大学大学院に外国人として初の入学、スタンフォード大学、ミシガン大学、コロンビア大学の教授、ドナルド・キーンさんと半年ごと日本に滞在し、翻訳と研究を続けてきたことなど、後半は数多く近代文学者との交流などが中心に興味深い内容が書かれている。その感想を電話で話しているうちに、ゆっくりと話をしようということになり、今回の座談会となった次第である。

サイデンステッカー氏は一九二一年二月生まれ、八十二歳になられたのだが、記憶も確かで、足をすこし悪くされているとはいえ、いたって矍鑠としている。九月十一日と十二日、大阪大学学士会館連絡事務所で、私のほかに、国文学研究資料館の加藤昌嘉助教授、藤井由起子COE研究員、それに録音や写真などをしてもらうために海野圭介助手とが出向いた。お疲れになるのを気にしながら、二日間の座談会、さまざまな話をうかがうことができた。一九四五年九月の戦後間もなく、海兵隊員として硫黄島から佐世保に上陸、それが日本の地への最初の出会いとなる。除隊後帰国し、国際関係論で修士号を取得、その後日本を再度訪れることになったのである。国務省のあった新橋の第一ホテルの部屋に、日本の研究者がタバコほしさ

に訪れて古典文学を教えてくれたこと、その折に読んだのが『蜻蛉日記』であり、これは後に初の古典文学の翻訳となったのである。東京大学では、池田亀鑑、久松潜一、吉田精一氏などの思い出、フォード財団との関係で日本の近代文学を研究するようになったことなど、サイデンステッカー氏の著作や以前に直接話を聞いたこともあったが、知らなかったことも多く、興味深い内容だった。

氏が毎日日記をつけていることは知っていたが、その七十冊は現在コロラド大学に寄託されていること、また海兵隊員としてハワイに滞在中にウェイリー訳の『源氏物語』を読んで感動したことなど、貴重な話を聞くことができた。とりわけ、「翻訳者がほめられるような翻訳ではだめだ」とのことばは、翻訳とは何かということを強く考えさせられた。翻訳者が表面に出るのではなく、あくまでも作品をいかに英語として表現し、作者を生かすかというのが、翻訳のもっとも大切な務めであるというのであろう。それとともに、平安末期の作品などは、原典に縛られるのではなく、自分なりに自由に翻訳をしていみたいとの夢も語っていた。



E.G. サイデンステッカー氏

サイデンステッカー氏と著者

伊井春樹 (いい・はるき)

1941年、愛媛県生まれ。1968年広島大学大学院文学研究科退学。1992年文学博士。国文学研究資料館助教授等を経て、大阪大学大学院文学研究科教授へ。2004年3月同退職。著書に『源氏物語注釈史の研究』(桜楓社)『源氏物語の謎』(三省堂)『成尋の入宋とその生涯』(吉川弘文館)『源氏物語注釈書・享受史事典』(東京堂出版)『物語の展開と和歌資料』(風間書房)ほか。専門は平安・中世文学研究。特に、海外の日本古典文学研究者との交流に力を入れてきた。

フィールドのさわめき

栞を求めて ―「右の耳に水」―

横田睦子

「栞（しおり）」の研究を始めてから十年が経とうとしている。

栞の原義―もともとは枝折と記し、旅人が山道などで木の枝を手折り、後進が迷わぬように道しるべとしたもの―を知ったときの感動、これまで分析を加えてきた「栞」の一葉一葉を手にしたときの喜びは今もこの手のうちに温かい。資料収集の作業そのものや、その過程での旅や出会いなどをいつもどこかで楽しんでおり、これが世に出て他の皆様のお目に触れることになろうとは想像すらしたことがなかった。大阪大学大学院言語文化研究科という「場」で少しづつ書き綴った論文の寄せ集めが、『渡米移民の教育―栞で読む日本人移民社会』のタイトルで出版されたのである。

拙著で分析を加えた「栞」とは、百年ほど前にアメリカを目指して海を渡った方々の間に流布した一枚刷りのリーフレットなどである。未知の世界への移動を経験し、異文化の壁を体感した人々は、想い想いの情報を「栞」というメディアを通して後進のものに示した。分厚い書物に触れる習慣のないものでも「栞」であれば柳行李や風呂敷包みに忍ばせられる。ときには長い船上でのお供役も果たしたはずだ。いわば、「栞」は最も小さな「紙上の学校」だったのだ。

例えば、和菓子の箱に入っていそうな栞、『渡米婦人心得』から「船上の心得」の一節。

細帯の時は必ず被布を被ること
（下着・寝巻きのような格好のときは必ず上着を着てね）
理由なしに偸笑せぬこと
特別親切にしてくれる男子に警戒し身に隙を見せぬこと
（　）内は横田訳

どうです？最近の一人旅の女性の皆さんも気をつけて。

百年のときを経ても、言葉は多少変わっても、移動する人間への眼差しはそう変わらない、そして、どこかあたたかい。「栞」はそれを証言するかのように今を生きる私に語り掛けてくる。

さて、この研究を始めてから十年と書いたが、実はもっと以前からその動機となるような経験があったのではないかとあれこれ思い返している。身近な人間、そして私自身が移動を重ねるうちに得たものあるいは失ったものについてである。

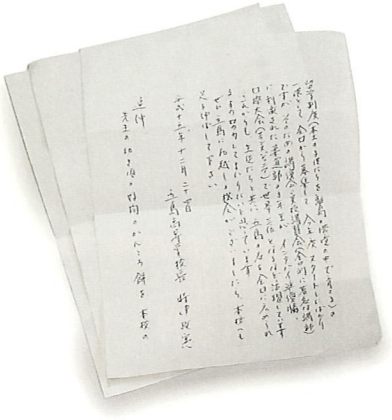
すでに他界した私の父は、十代の初め、初めて生まれ育った五島列島の福江島を出て大阪の親戚を訪ねる際、とうとう他の誰とも一言も言葉を交わさず、大阪駅に到着するまで立ったままで車中を過ごしたそうである。福江島から長崎市まで船で五時間以上、長崎駅から大阪駅まで列車でまる一日かかった時代である。同じ九州とはいえ長崎市は父にとって大きな町であり、目的地の大阪はさらに大規模な都会だったのである。今では想像もつかないほどの文化差が父の前に立ちはだかっていたのだ。大阪で観た欧米の映画の話、大阪で食べたきつねうどんの話、大阪は当時の西日本の少年少女にとってそうであったように父にとってもまさに憧れの地であったのだろう、後年大阪での思い出話をするときの父の目には少年の輝きがあった。かしこまった席の父の言葉のどこかにいつも大阪訛りがあったのは、その後数年を大阪で過ごすことになった以上に父の文化のスタンダードが大阪との出会いによって生成されたからに違いない。

横田睦子（よこた・むつこ）
「インターフェイスの人文学」特任教員（COE）
2002年　大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程修了
2000年　第25回国際理解教育賞（エースジャパン賞）
著書「渡米移民の教育―栞で読む日本人移民社会」※写真右（2003年、大阪大学出版会）
専門は言語文化学・社会教育（移民教育、薬物教育など）

伊万里生まれの祖母は、福岡の嫁ぎ先が海運業だったことから、ある時期から福江島の港近くに暮らすことになり、祖父が船の事故で他界した後も五島の文化のうちに五島弁で生活していた。長崎の町の真ん中の子供だった私は学校が休みになると、まるで船の積荷か何かのように大波止（長崎市、出島の隣です）の船着場で福江島に向かう誰かに簡単に預けられては、この祖母を訪ねた。勝手知った二等船室に走り、積み上げられた中から自身の毛布と洗面器（船酔いに備えて）を確保し、その日の朝に市内のベーカリーで焼かれたパン（当時はお土産として喜ばれた）、宿題と着替えを荷置棚に放り込む。それさえすめば、知らない大人や子供と「今日は凪でよかった」などと話したり、甲板に出ては航行に沿って跳ね急ぐ飛魚の群れを眺めたりしながら福江港までの四時間半を過ごすのだ。船を降りた後の、陸の上でもしばらく体が揺れているような感覚が懐かしい。桟橋周辺で売られていた海産物の匂いは今でも鼻先によみがえる。好物のかんころ餅（さつま芋ともち米でできた五島の名産品）を求めに祖母と連れだって歩いた海沿いの道には湿った潮風が吹いていた。そして小学生だった私を親戚が待つ大阪に連れ出し、梅田の百貨店や京都の歌舞伎へと誘ってくれたのもこの祖母だった。大阪での祖母は、いつもと変わらない地味な色の和服に包まれてはいたものの、五島では隠し持っていたような表情を、白い半襟の上にたたえていた。長崎の生家には、この祖母を介して、都会の学校の受験や商用のため、五島から、そして五島へと移動する客が絶えることがなかった。「むっちゃん、『みんのみんにみん』て何かわかるね」、私は実に多くを移動する人々の言葉や指先から教わったものだ。

……などというようなことをちょっと「あとがき」に書いたので、父がほんの一時期お世話になった長崎県立五島高校に一冊送らせていただいたところ、クリスマスイヴの日に思いがけないことが起こった。お目にかかったこともない五島高校の校長先生から連絡があり、職員の方お手作りの「かんころ餅」を送って下さるとのことだった。受け取った「かんころ餅」には便箋三枚のお便りと何という植物だろう、七つ葉の緑が添えてあった。それは昔、私が初めてアメリカに旅立つとき、もう一人の祖母が赤と白の水引を結んで道中のお守りにと持たせてくれたものだった。

私は、今でも大阪大学という鬱蒼とした森の中で、私のために手折られた「栞」―道しるべを探す旅を続けている。



人文学のフロンティア

「記憶の文化」を考える
―オーストリアにおける「集合的記憶」を事例に―

水野博子

現代社会の構造が複雑かつ急速に変化する今日、人文学においても、従来の学問領域・空間を超越し、広い視野からさまざまな問題を複合的に考察することが要請されている。そうした状況において人文学やその関連領域に携わる人々がひときわ関心を寄せるテーマの一つに、「記憶」の問題がある。中でも人間社会が織り成す歴史―文化とのかかわりにおいて、「記憶」研究は重要な意味を持つようになってきた。そうした関心領域を筆者は「記憶の文化」(Erinnerungskultur)とよんでいる。

「記憶の文化」研究では、長い間「過去」を「占有」してきた既存の政治史中心の「歴史学」の領域を超えて人類学や文化史や社会学などと結合し、さまざまなテーマ設定が可能となっている。実際、たとえばどのようなものがありうるかと少し思いをめぐらせただけでも、個人、集団、国家、帝国、民族、ジェンダー、マイノリティ、植民地、暴力、戦争、身体、表象、伝統、言語、教育、シンボル、アイデンティティなど、今日さまざまな考察が行われている。これだけテーマが多岐に渡ると、そこに普遍的なディシプリンを総合的に体系付けて確立することは難しいが、少なくとも「集合的記憶」がひとつの重要なキー概念であると思う。

「集合的記憶」とは、個人の記憶(伝達的記憶)も文化的記憶も社会的なコンテキストに制約され、そこに再構成されるという理論に基づいている。換言すれば、社会が形成されている限り、そこに帰属する社会構成員によって形成され、共有されるものであり、要するに社会集団を支える「アイデンティティ」の重要な構成要素となるといってよいだろう。二〇世紀の歴史を考える際に最も最優先して安定化されるべき社会のシェーマが国民国家であったとするならば、それを支えたもっとも重要な「集合的記憶」は「国民的記憶」ということになる。その際、「国民的記憶」がどのように形成されたのか、またその枠に包含されたものと、逆に排除されたものは何かを明らかにすることが、今日的課題をなしている。

たとえば筆者は、日本では一般に音楽の国として人気の高い中欧の小国オーストリアの現代史を研究している。オーストリアは、一九三八年三月にナチス＝ドイツに「併合」された経験を持つため、第二次世界大戦後はナチス＝ドイツによって侵略された「最初の犠牲国」という自己認識を形成し、一九八〇年代後半までそれを維持・強化してきた。こうした認識は多くのオーストリア国民にも共有され、国内の安定には欠かせない重要な「集合的記憶」となっていった。しかし現実には、非常に多くの人々がナチス＝ドイツの「一部」となることを歓迎したのであって、一方的な「犠牲者」意識は歴史的事実とは食い違っている。にもかかわらず「犠牲者」という理解が戦後のさまざまなコンテキストにあって「オーストリア国民」の「集合的記憶」の中核を占めたため、故郷を追われたオーストリア系ユダヤ人や政治的被迫害者たちの記憶は排除されなければならず、ゆえに「オーストリア国民」という「集合的記憶」にもそれらは含まれないこととなった(写真①)。一九八〇年代後半以降さまざまな契機によって「犠牲者」という「集合的記憶」が批判されるようになると、オーストリア・アイデンティティが危機といわれる状況に陥ったのも当然であった。

こうした「集合的記憶」がどのように形成されたのかを探る具体的な題材として、しばしば記念碑や戦没者の追悼行為、国歌、国旗、国民的英雄などが取り上げられる。

これらすべては、（ナショナル）アイデンティティを構成する重要な要素（またはそのための「装置」）であり、記憶研究の中でも「記憶の場（所）」や、「記念」あるいは「コメモレイション」の研究として展開されるものである。

たとえば、オーストリアには今でもほとんどの村や町に英雄（戦没者）記念碑が町の中心部にみられるが、それらの多くは、第一次世界大戦の戦没者を追悼するために建立された碑に、第二次世界大戦中の戦没者の追悼の役割を付加した形をとっている（写真②）。例としてザルツブルクの市営墓地の一角にある英雄記念碑を見ると、そこには「祖国のために死んだすべての者たちを追悼して、一九一四～一九一八及び一九三九～一九四五年」と刻まれている。この碑が現代のオーストリアの地にある以上、ここにある「祖国」とは「戦没者」にとっても現代のオーストリアであったかのような印象を受ける。しかし実際には、二つの年号が示すとおり、前者は旧ハプスブルク帝国下で行われた第一次世界大戦であったし、他方、後者は第二次世界大戦、すなわちそれは「ドイツ第三帝国」を守るための戦争であった。ということは、オーストリアが長い間自国のアイデンティティの拠り所としてきた「犠牲者」という「集合的記憶」とはすぐには相容れないのであるが、にもかかわらず、特に一九五〇年代以降、戦没者の死がオーストリアのためであったものとして顕彰されることになったのである。

残念ながら、上記のような状況にいたる特殊オーストリア的な背景をここで論じることはできないが、記憶研究に携わる以上、多かれ少なかれこうした「矛盾」に出くわすため、それを理解するべく研究者はしばしば頭を悩ませることになる。重要なのはしかし、そうした矛盾を解消することでなく、なぜ矛盾する過去の表象がひとつの社会集団において成立可能か、そしてそれはどのようなコンテキストにおいてであり、そうした記憶の主体は誰か、を問うことにあると思うのである。それは換言すれば、あるひとつの記憶を共有できないものはその集団から「排除」され、その集団にとって「他者」を形成するということをどのように考えるべきかを私たち一人ひとりが問うことでもあるだろう。

総じて記憶研究は、「歴史に真実も事実もなく複数の物語があるだけである」というようななげやりな結論に行き着くことなしに、複数の「集合的記憶」を認めることが、結局は自己が帰属する集団が自明のものとして伝達していく記憶―そしてそれは多分に無自覚的に「文化」として染み付いている場合がある―を疑ってみることと表裏一体の関係にあることを自覚させてくれるように思うのである。そこにこそ記憶研究の魅力があると同時に、広く社会を写し出す人文学においても一考に値する問題群が提出されているゆえんではないだろうか。

上／オーストリア・アイゼンシュタット市のユダヤ人墓地（写真①）
下／同市・戦没者記念碑の一角（写真②）

水野博子（みずの・ひろこ）

1970年3月生まれ。2000年グラーツ大学にて博士号（PhD.-歴史学）を取得。大阪大学言語文化部講師を経て、2004年同助教授に就任見込み。主な業績として、"Die Länderkonferenzen von 1945 und die NS-Frage"，in: Zeitgeschichte (Wien 2001) Jg. 28, H. 5.、「戦後初期オーストリアにおける「アムネスティー（恩赦・忘却）政策」の展開」『東欧史研究』（第24号、2002年3月）など。

《編集後記》

ニューズレター第3号も、執筆者の皆様に力のこもった原稿をいただき、読み応えのある一冊になったと思います／マンガ対談をマンガ仕立てにしてしまったメディア・スタッフ、西田さんの力業には、対談者二人してア然、そしてマイッタ!／COEプログラムの中間評価を控え、活動記録としての側面にも力を入れました／研究スタッフの息もぴったりそろい、「インターフェイスの人文学」はいよいよ3年目、第二の船出へ。（金水）

大阪大学21世紀COEプログラム
「インターフェイスの人文学」ニューズレター
Interface Humanities　03

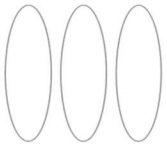
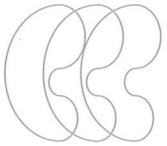
発行＝「インターフェイスの人文学」研究開発委員会
編集長＝三谷研爾
編集＝金水敏　永田靖　山中浩司
ロゴデザイン＝奥村昭夫
編集協力・デザイン＝彩都メディアラボ株式会社
レイアウト＝西田優子　清水良介
印刷＝株式会社写真化学

発行日＝2004年3月10日

連絡先＝〒560-8532　豊中市待兼山町1-5
大阪大学大学院文学研究科内
「インターフェイスの人文学」事務局
Phone: 06-6850-6716
Fax : 06-6850-6718
http://www.let.osaka-u.ac.jp/coe/
coe_office@let.osaka-u.ac.jp

Osaka University
The 21st Century COE Program Newsletter
Interface Humanities　03

Published by COE Committee Interface Humanities
Chief editor: Kenji MITANI
Editors: Satoshi KINSUI, Yasushi NAGATA, Hiroshi YAMANAKA
Logo Designer: Akio OKUMURA
Editorial advisor: Saito Media Lab Co., Ltd.
Layout: Yuko NISHIDA, Ryosuke SHIMIZU
Printed by Shashin Kagaku Co., Ltd.

Published on March 10, 2004

Contact address: Interface Humanities Office
School of Letters, Osaka University
1-5 Machikaneyama-cho, Toyonaka, Osaka 560-8532
Phone: +81-6-6850-6716
Fax: +81-6-6850-6718
http://www.let.osaka-u.ac.jp/coe/
coe_office@let.osaka-u.ac.jp